

広島文化学園大学 研究ブランディング事業
平成28年度の調査・研究等に関する外部評価委員会の開催結果について

【外部評価委員】

- ・森永康子氏【広島大学大学院教育学研究科教授】
- ・長谷川博氏【広島大学大学院総合科学研究科教授】
- ・青柳幸利氏【東京都健康長寿医療センター研究所副部長】
- ・河下寿昭氏【呉市文化スポーツ部副部長兼スポーツ振興課長】
- ・児玉安司氏【広島市教育委員会特別支援教育課長】

広島文化学園大学の研究ブランディング事業における平成28年度の調査・研究等の取り組みとして、外部評価委員会を、平成29年5月17日、広島市安佐南区の広島文化学園大学 長束キャンパスで開催しました。

学校法人広島文化学園の森元弘志理事長は冒頭で「乳幼児から高齢者、障がいのあるなしにかかわらず、すべての人々が健康に暮らす共生社会の実現」と、「自治体などと共に社会的弱者と呼ばれる人々を対象とした施策展開に反映させる」ことを目指して研究を推進していくと、開会の挨拶で述べました。その後、外部評価委員会の委員長である森永康子氏の司会のもとに、広島文化学園大



＜森元弘志理事長の挨拶＞

学から研究ブランディング事業を推進するにあたっての中期経営計画Ⅲ（平成28年度～31年度）、対人援助研究センター規程及び外部評価委員会要項、学外関係機関との連携等の事業実施体制について報



＜外部評価委員会の様子＞

告。次に、3つの研究部門の責任者である土肥敏博教授が看護・医療福祉研究部門、山崎昌廣教授がスポーツ・健康福祉研究部門、山崎晃対人援助研究センター長が子ども子育て・教育福祉研究部門の平成28年度の調査・研究等の活動についてパワーポイントを使って報告。また、広島文化学園の自己点検評価及び調査・研究等を推進する環境として研究設備や施設の整備に関する報告をしました。

この後、外部評価委員から報告に対して多くのご意見・ご提案をいただきました。以下は外部評価委員会による4つの視点からの意見。

1. 【事業推進体制等について】

- 学長のリーダーシップの下、優先課題として全学的な独自色を大きく打ち出す研究に取り組むため、学長を本部長とし、3研究科それぞれの特色をいかした取り組みであること、加えて事務局の強力なバックアップを感じ取りました。中期経営計画Ⅲおよびそれに基づいた長期行動計画の中にも明確に位置づけ、全学的な取り組みにしようという言葉にふさわしい事業推進体制を構築していると思います。
- 大学全体が組織的に取り組むプロジェクトとして動いており、今後それらの成果が地域共生や地域活性に貢献する可能性が大きく、また、全学の構成員の協力体制が得られるような組織づくりができています。高く評価できます。特に、対人援助に注目した点はオリジナリティがあります。
- 全体として、短期間にもかかわらず、貴学における3部門の特性を活かした組織づくりがよくできていると思います。
- 社会的弱者と言われる人たちの中には、誰でも必ずやってくる「高齢(子育て)」と、見逃されがちな「障害」を抱えている人達がいるが、誰にも、社会の中で人として幸せに生きる権利があります。そのような中で、それぞれ専門の先生方が多方面から専門的知見で研究されることは大変有意義であり、また、それを有機的に結びつけることで、当研究が研究のみに終わらず、実現性の高い対策方法につながるものと考えます。



<看護・医療福祉研究部門の発表>

2. 【調査、研究の活動等について】

- 事業を通じて、3つの部門のそれぞれの得意とする研究がうまく活かされていくことが期待されます。また、この度の会では研究部門の発表時間が限られていたためだと思いますが、今回ご紹介いただいた調査や実践をこれからどのように発展させるのかという点が今後の課題だと思います。
- 3つの研究部門とも、大学が主導して調査や研究を推進しており、それらはすでに地域住民に対してプラスの効果となっており大変意義深く、素晴らしい内容に感じました。特に、スポーツ、健康福祉研究部門では、心理的指標や生理的指標などの客観的指標を用いた事業報告があり、高く評価できます。
- 3部門それぞれの特色を活かした調査、研究の方向性がよく理解できます。
- 「カフェ」というキーワードで、各分野から、「カフェ」の活用について、特にエビデンスに基づいた研究は非常に画期的であると考えます。是非、「カフェ」が、地域で個人が抱える様々な悩みを解決する場となり、また、参加してみたいという場になるような内容とは何か、さらには、家から出れない人をどうやって参加させるかということにも踏み込んだ調査、研究になることを期待します。

3.【課題と改善点について】

- 平成28年12月に開催されたキックオフ・ミーティングの際にも「3つの部門をどう統合するのか」という質問があったように記憶しています。研究、実践課題が異なるために統合というのは難しいのかもしれないと思いますが、研究の一部は部門を超えた共同研究として発展させるという形が必要であります。一方、これからもそれぞれの部門の特色をいかした研究に焦点を当て展開するやり方もあります。その時はメリットを強調する必要があると思います。
- この事業に学生がどのように関わるのかあるいは学生の関与は特に必要としないのかについてもご説明いただきましたかったところです。研究マインドをもった実践家はどの領域においても重要な存在だと思います。



<スポーツ・健康福祉研究部門の発表>

面白い。さらに、参加する学生がこれらの事業を通して、それぞれの学部で学んだ専門性をいかしつつ、どう卒業後の進路に反映していくのが重要であると思います。

- 呉市は他の体育大学とも包括連携協力を行っているようですが、これらの事業との関連性や違いを明らかにし、このブランディング事業を推進していく必要があると思います。おそらく、他の体育大学はアスリート育成や、競技力向上、子どもの体力向上などが中心であると思うが、この事業ではあくまでもインクルーシブ・スポーツに特化して事業を推進すべきであると思います。

- 分野にもよりますが、調査状況に依存しやすい主観的なアンケートによる項目が比較的多いと感じます。本研究成果を一般化、普遍化するためには、もう少し客観的な測定変数を含めて結果の曖昧さを減らすことが大切と考えます。

- いずれの分野の研究においても、これまでの調査を基に仮説をたて、その検証が主と考えられるが、この度の研究段階において、調査研究に携わる協力者(教諭、学生等)も、この研究に至るまでの過程、及び目的を



<子ども子育て・教育福祉研究部門の発表>



＜外部評価委員の意見発表＞

理解した上で、“気づき”を見落とさないよう、常に情報共有が必要と考えます。

●現状把握として、民生委員など地域で活動している方からのご意見の聴取なども、研究の参考になるものと考えます。

●子ども子育て・福祉研究部門においては、多くの子ども、保護者に利用してもらう必要があることから、広島市子ども療育センター等の関係機関との連携を図ることが必要であると考えます。

4. 【特記すべき事項について】

●様々な興味、関心を持った世代の異なる住民が集える「来んさいカフェ」を設置し、そこを中心にコミュニティづくりを目指す本事業の展開は素晴らしいと思います。また、学生が直接かかわるので、卒業後の人材育成などにも貢献できる有意義な取り組みだと思えます。

●この度の研究成果を、一緒に研究した学生が、社会に出て拡散させていくことが重要ではないかと考えます。

●それぞれのキャンパスにおいて「来んさいカフェ」が運営され、そこに学生が関わることで、カフェに訪れる人々はもちろんですが、サポートする学生たちにとっても、将来、看護師、保育士、教員などになったときに、ここでの経験は貴重なものであり、学生にとってのメリットも大きいと思われま

5. 【総評】

●大変短い期間でありながら、これだけのことを遂行されたという点で高く評価できます。助教の採用、物理的なセンターの開室など、人的物理的資源も充実してきているので、29年度からはさらに充実した取り組みになると期待できます。現代社会のニーズにあわせた地域密着型の取り組みであり、地域に還元できるような研究成果が生まれることを期待しています。

●主に推進していく事業内容が、「対人援助」「インクルーシブ・スポーツ」「カフェ」など、どれも新規性や独創性が高く、有意義な取り組みと感じました。また、単に研究業績や資金獲得にこだわることではなく、地域共生や地域活性を主なビジョンとしている点も高く評価でき、大変興味深い事業です。

●一般に、医療費などの諸問題を解決するためには、地域とのかかわりが希薄で社会参加に消極的な住民への対応が重要になります。本事業では、「来んさいカフェ」を魅力的なものにして多くの方々に継続的に来て頂けるようにすることはもちろん、それでも来られない住民へのケアをどうするかについてもご検討いただければ幸いです。そのためにも、看護、医療福祉研究部門で採用を検討されている活動量計の全部門での共通利用を提案させていただきたいと思えます。活動量計のデータは、単に運動量のみならず、社会参加の程度や地域の様々な問題点(地理的、環境的要因)なども顕在化してくれるはず

●現在、日本が抱えている「子育て」「高齢」問題への対応策の一つとして、「カフェ」の活用というのは、先進的な試みと考える。内容の検討、検証を行い、地域の課題解決の糸口になることを期待します。また、その結果を地方自治体に提言し、共に地域活性化の一翼を担うことが、地域に密着した大学の貢献、価値に結びついていくものと考えます。そのようなことから、この度の研究への期待は非常に高いものがあります。



<外部評価委員委員長の森永康子教授>

●平成28年12月にキックオフ、ミーティングを開催し、活動について本格的に推進されるのは平成29年度からだと思います。例えば、「来んさいカフェ」と同様の機能を持つ、集いの場所は、かなり用意されてきていると思います。大学が運営する強みとしては、学生というマンパワーがあります。さらに、その学生も、キャンパスによって、それぞれの専門性を持っています。この強みを最大限に生かし、地域の発展に寄与されることを期待しています。